

分配と労働生産性の動学モデル

松田麟太郎(明治大学大学院)

要旨

本稿の目的は、Dutt (2006)によって構築された「技術進歩を含み、総需要と総供給の両方が役割を持つ」(Dutt, 2006, p. 331)成長モデルを基にして、分配の動学を考慮した修正モデルを構築することである。総需要が長期的な成長率に影響を及ぼすという Dutt (2006) モデルの重要な結論は、総需要の増加に伴う雇用率の上昇が労働生産性上昇率を上昇させるという想定から導かれる。しかし、彼のモデルでは労働生産性上昇率が実質賃金増加率から乖離した場合に生じる分配の変化が明示的に分析されていない。もし、労働生産性成長率が持続的に実質賃金増加率を上回るならば、利潤分配率が持続的に上昇し続けることになる。本稿は、労働生産性成長率が実質賃金増加率から乖離した場合の調整過程を明示的に導入することによって、上述のような利潤分配率の持続的変動を抑制するメカニズムを備えた修正モデルを構築する。修正されたモデルは、利潤分配率と労働生産性の連立微分方程式として表される。安定な定常状態では労働生産性成長率が実質賃金増加率と等しくなり、実質賃金増加率が長期的な成長率の決定に影響を及ぼすことが示される。

キーワード: 成長、分配、労働生産性

JEL 分類コード: E12, E24